

- で 勝者ティサマルコスを讃えるため、アイアコス一族の物語を詳しく話せないという意味であるという解釈は、E. L. Bundy, *op. cit.* p. 3 n. 11, A. M. Miller, *art. cit.* pp. 205-6, W. H. Race, *op. cit.* p. 29. 勝者とその一族を讃えるつもりだと宣言することで、彼らを安心させているのだという解釈は、P. Kyriakou, "A Variation of The Pindaric Break-off in Nemean 4" *AJP* 117(1996), pp. 17-35. 又 C. Carey, *art. cit.* p. 147 は、ピンダロスが自分で物語を変えようと決心していることを意味すると述べている。
- 14) 「深き海の塩水」は、テーバイとアイギーナを引き離すもの、敵の嫉みを表わすもの、テラモーンの物語をこれ以上語れないことを意味する等の解釈がある。「深き海の塩水」を勝者と詩人を引き離そうとするものと解釈し、「陰謀」をピンダロスの詩のライバルによる厳しい批評と指摘しているのは、M. Lefkowitz, "ΤΩ ΚΑΙ ΕΓΩ : The First Person in Pindar" *HSCP* 67 (1963) p. 218, E. L. Bowra, *op. cit.* p. 273, A. M. Miller, *art. cit.* pp. 210-211、又同様に「深き海の塩水」を勝者と詩人を引き離そうとするものと解釈し、「陰謀」を勝者への人々の嫉妬と考えているのは、C. Carey, *art. cit.* pp. 146-150, M. M. Willcock, *art. cit.* pp. 8-9, P. Kyriakou, *art. cit.* pp. 30-31. A. M. Miller, *art. cit.* p. 295 n. 13, P. Kyriakou, *art. cit.* p. 24 n. 24 参照。D. S. Carne-Ross, *op. cit.* p. 115 は、「深き海の塩水」をテラモーンの冒険をこれ以上続けることはできないことを意味する指摘し、これは69行目のガティスと同じ意味であり、「陰謀」をテラモーンの物語を続けることと考えている。
- 15) *Ol.* 10. 23
- 16) E. L. Bundy, *op. cit.* p. 3 n. 11 は、「光」への道を祝勝歌の技術と解釈し、A. M. Miller, *art. cit.* p. 211 は、詩歌によってピンダロスのライバルに優っていることである解釈している。
- 17) W. Jaeger, *Pindar : The Voice of Aristocracy, Paideia*, 1957, pp. 214-215
- 18) *Nem.* 5. 40
- 19) *Nem.* 3. 40-43
- 20) この神話にペーレウスと勝者の類似を見る解釈は、ほとんどの学者の一致した見解である。ケイローンとピンダロスの類似については、A. Köhnken, *op. cit.* p. 211 がこれを述べたが、P. Kyriakou, *art. cit.* p. 25 は、ピンダロスの助けがなければ、勝者は、武勇を示せないことを表わすとして反対している。しかし、ピンダロスによる祝勝歌が、勝者を最良の状態にすることは、冒頭からすでに述べられていると思われる。
- 21) *Pyth.* 3. 93-96
- 22) 写本では、未来形 *ἀείσεται* であるが、Hermann が *ἀείσεν* に校訂した。C. M. Bowra, *Pindari Carmina*, Oxford, 1947 は、*ἀείσε* と校訂している。D. S. Carne-Ross, *op. cit.* p. 119 は、これは、未来形であることを強調している。
- 23) D. S. Carne-Ross, *op. cit.* P. 113 は、死者も祝勝歌を創ることができるかと考察している。
- 24) 死者が詩歌を聞くことについては、*Ol.* 8. 77-8, *Ol.* 14. 21-4 でも歌われている。
- 25) *Pyth.* 3. 54-60

Μοιοῖαν θύγατρεις αἰοδαὶ θέλξαν νιν ἀπτόμεναν
οὐδὲ θερμὸν ὕδωρ τόσον γε μαλθακὰ τέγγει
γυῖα, τόσον εὐλογία φόρμιγγι συνάορος.
ῥῆμα δ' ἐργμάτων χρονιώτερον βιοτεύει,
ὅ τι κε σὺν Χαριτων τύχη
γλῶσσα ψρενὸς ἐξέλοι βαθείας.

- 同様に3行目の *νιν* を *πόνοι* の代名詞と解釈しているのは、J. H. Finley, *Pindar and Aeschylus*, Cambridge, 1955, pp. 103-104, E. L. Bundy, *Studia Pindarica*, Berkeley, 1962, p. 2 n. 9, p. 259, C. M. Bowra, *Pindar*, Oxford, 1964, pp. 258-9, M. M. Willcock, "Second Reading of Pindar: The Fourth Nemean" *G & R* 29 (1982), pp. 1-10, D. S. Carne-Ross, *Pindar*, New Haven, 1985, pp. 111-2, W. H. Race, *Style and Rhetoric in Pindar's Odes*, Atlanta, 1990, p. 94 n. 25. これに対して、G. A. Machemer, "Medicine, Music, And Magic: The Healing Grace of Pindar's Fourth Nemean" *HSCP*, 1993, pp. 113-141. は、Bury に従って *νιν* を *εὐφροσύνα* の代名詞と考えている。すなわち「歌は、喜びに触れ呪文をかける」と解釈している。
- 2) E. L. Bundy, *op. cit.* p. 2 n. 9 は、「喜び」を勝利の宴と解釈し、ここでは勝利の宴と詩歌が比較されていると考えている。すなわち、宴は、直ちに勝者の疲れを癒し、詩歌は、勝利の行為を永遠のものにするということである。G. A. Machemer, *art. cit.* pp. 113-141 は、「喜び」を宴の喜びではなくより精神的なものと解釈し、この箇所には癒し手と詩歌の類似を考えている。
- 3) *Ol.* 6. 44, *Pyth.* 4. 111
- 4) *Nem.* 3. 64, *Pyth.* 9. 90, *Nem.* 9. 42
- 5) *Ol.* 5. 14
- 6) *Pyth.* 8. 97
- 7) *Nem.* 3. 84, *Pyth.* 3. 75
- 8) G. A. Machemer, *art. cit.* pp. 130-132, G. E. R. Lloyd, *Magic, Reason and Experience*, Cambridge, 1979, p. 29.
- 9) *Nem.* 3. 18
- 10) 同様の解釈は、A. Köhnken, *Die Funktion des Mythos bei Pindar*. Berlin, 1971, pp. 196-97, F. J. Nisetich, *Pindar's Victory Songs*, Baltimore and London, 1980, p. 224, T. K. Hubbard, *The Pindaric Mind*, Leiden, 1985, p. 140. ヘーラクレスではなくテラモーンが強調されているという見解は、C. Carey, "Three Myths in Pindar: N. 4, O. 9, N. 3" *Eranos* 78 (1980), p. 146, M. M. Willcock, *art. cit.* p. 7, A. M. Miller, "N. 4. 33-43 and The Defense of Digressive Leisure" *QJ* 78 (1983), pp. 203-4, D. S. Carne-Ross, *op. cit.* p. 114.
- 11) 正義の根本原理、cf. Aristotle, *Ethics*, V, 5, 3. Aesch. *Choeph.* 314.
- 12) 苦しみを伴う功績の偉大さを表しているという見解は、ほとんどの学者に一致した見解である。
- 13) ピンダロスの歌の形式、規則が物語を打ち切らせていると解釈しているのは、E. L. Bowra, *Pindar*, Oxford, 1964, p. 196, J. H. Finley, *op. cit.* p. 33, 限りある時間

『ビューティア祝勝歌』第3では、医者となったアスクレーピオスは、その技術により死者を蘇らせたため、ゼウスの雷霆によって殺された²⁵⁾。死者を生き返らせることは、死すべき人間に、神の特権である不死の命を与える行為であり、神々に対する不敬である。神は人間に、医術を与えたが、それは神の認める範囲でしか行なうことができないことをこの神話は明らかにしている。すなわち、人間の行なえる医術には限界がある。生と死の境を越えようとするのは、人間にとっては危険なことである。神々の怒りを招かぬよう注意しなければならない。致命的な病を負った人間の肉体は詩歌によっても癒されることはできないであろう。しかし、『ネメア祝勝歌』第4の冒頭で歌われていたように、詩歌は、人間の行為を久しいものにすることができる。そして又、ここで言われているように、詩歌は、生を超え死者の心にも届き、これを慰め癒すことができるものと考えられる。ここに癒し手である詩歌だけがもつ力があると思われる。

これに続けて、ピンダロスは歌っている。「それぞれの者にそれぞれの時代の友がいる」(91)。すなわち、それぞれの時代に勝者を讃える友である詩人がいる。そして、詩人は勝者を「この上なく素晴らしく語ることを望む」(92)のである。ここで彼が述べているのは、それぞれの時代のそれぞれの勝者に疲れた心身を癒す友なる詩人がいるのだということであろう。

そしてピンダロスは、言葉を巧みに操って讃歌を創るのだとレスリングの用語を用いて宣言し、この祝勝歌を終えている。

結論

『ネメア祝勝歌』第4では、冒頭で、癒し手である詩歌の力が述べられている。この作品において、「医者」「四肢を優しく和らげる」「呪文」という言葉は、冒頭でしか述べられない。しかし、考察してきたように、最初に強調された詩歌の癒しの力は、この作品全体に意味をもたせるものとなっている。度々問題にされてきた2つの神話は、突然、中断されているのではなく、詩歌のこの力を示唆し、一つの流れとして歌われているのである。最も不明瞭とされるペーレウスの神話の後の33-45行も、このことを考え合わせると容易に理解されると思われる。

さらに、神々は、死者を蘇らせることを許さず、身体を癒す医術は、人間の生の限界を越えることはできないが、しかし詩歌に伴う癒しの術だけは、人間の生と死の境を容易に越え、人間の行為を永遠のものにすることで、その心を癒し、又、死者の心にも届き、これを慰め癒すことができる。これは、詩歌のみに与えられた力であると思われる。

このように、ピンダロスは、『ネメア祝勝歌』第4を通して、困難の伴う戦いと勝利、そして、その疲労とそれを癒すことができる詩歌の力を歌っているのである。

注

- 1) Ἄριστος εὐφροσύνα πόνων κεκριμένων
ἱατρός· αἱ δὲ σοφαὶ

スが生来の武勇によって勝利し、癒しを得るという神の定めは、詩人ピンダロスによって成就されるのである。それは、ペーレウスと同様に、人間としての最高の幸福と考えることができよう。

この後、ピンダロスは、「ガティスを越えて暗闇に行くことはできぬ」と述べている。「なぜなら、アイアコスの息子たちについて全てを物語ることはできぬ」からである。そこでピンダロスは、ペーレウスの物語を終え、勝者の一族の讃歌に移行する。ペーレウスの女神との結婚は、ガティスすなわち人間の幸福の限界であり、これを越えることはできない。従って、これ以上話を続けることはできないのであろう。

ピンダロスは、この神話によりペーレウスとティーマーサルコスの試練と勝利、そして人間としての最高の幸福である心身の癒しを語りたかったのであろう。従って、ここでピンダロスは、この物語を終え、勝者の一族の讃歌に移行するのだと考えられる。

ティーマーサルコスの一族は、「勝利の歌の下僕」(78-79)であった。勝者の亡き伯父カリクレースは、かつてイストミア競技の勝利者であった。

気高き行為の讃歌は、人に王のごとき幸福を与える。
アケローンの河の傍らに住むカリクレースが
我が高らかな声を聞かんことを。(84-86)

祝勝歌は、「人に王のごとき幸福を与える」ものである。ここでピンダロスは、冥途を流れる河アケローンの傍にいる伯父カリクレースにこの祝勝歌を聞くようにと述べている。すなわち、死者は、歌を聞くことができるのである。讃歌はさらに、死んだ詩人であった祖父エウパネースに言及する。

汝の老いた祖父エウパネースは、
喜んでカリクレースを歌うであろう²²⁾。
それぞれの者にはそれぞれの時代の友がいる。
詩人は、出会った行為をこの上なく素晴らしく語ることを望む。(89-91)

ここでは、死者である祖父も歌うと述べられている。死者は、歌を聞くことも歌うこともできるのである。この祝勝歌では、亡くなった3人の勝者の一族に言及している。14-21行では、亡くなった勝者の父ティーモクリトスのことが述べられていた。もし生きていたならば、息子の勝利を祝ったであろうと言われる父も又、今この祝勝歌を聞いているのであろうか²³⁾。

ピンダロスは、他の祝勝歌においても、死者が詩歌を聞くと述べている。例えば、『ピューティア祝勝歌』第5では、死んだキュレーネーの王たちが、子孫のアルケラーオスの祝勝歌を心で聞き、喜んでいることが歌われている(96-103)²⁴⁾。ピンダロスによると、詩歌は、容易に生と死の境を越えていくのである。

彼は、車座の席の宴を目のあたりにした。
そこには、空の王と海の王が座していたのだ。
そこで神々は、ペーレウスの息子に力の贈り物を授けたのである。
ガティスを超えて暗闇に行くことはできぬ。
再び、船の舵をエウローパーの地に戻すのだ。
なぜなら、アイアコスの息子たちについて
全てを物語ることは、できぬことだ。(54-72)

ここで歌われているのは、アイギーナ出身のペーレウスの次のような神話である。彼がイオールコス王ペーリアスの息子アカストスの下に身を寄せていた折、アカストスの妻ヒッポリュテーは、ペーレウスに恋をし言い寄ったが拒絶された。彼女は怒り、アカストスにペーレウスが自分に不倫をしかけたと訴えたのである。アカストスは、客人を殺すことを好まず、ペーレウスをペーリオン山に狩りに連れ出し、彼が眠っている間にダイダロスが彼のために創った不思議な剣を奪って捨て、彼を残して帰った。目覚めたペーレウスは、乱暴なケンタウロスに囲まれて、危ないところをケイローンに救われた。後に、彼は、イオールコスを攻め滅ぼし、ヒッポリュテーを殺害する。

ケイローンは、海神ネーレーウスの娘、女神テティスを人間と結婚させたいというゼウスの意向を知り、ペーレウスにテティスとの結婚を勧め、様々な姿に変身する女神を捕らえて放さぬよう忠告した。ペーレウスが炎や獣に変身する女神を捕え、放さなかったため、遂に彼女はもとの姿に戻り、彼と結婚する。結婚式は、ペーリオン山において争いの女神を除く全ての神々の列席のもとに行なわれた。

ピンダロスは、この神話によって何を語ろうとしているのであろうか。テラモーンの神話と同様にここでもケイローンとピンダロス、ペーレウスと勝者ティーマーサルコスとの類似がみられると思われる²⁰⁾。

次々と変身する女神を捕らえて離さないペーレウスの姿は、ティーマーサルコスのレスリングの試合を連想させる。両者とも格闘することで困難な戦いに勝利を得たのである。ペーレウスは、ケイローンの助力によりヒッポリュテーの陰謀による苦難を克服し、女神テティスを妻とすることができた。その結婚の宴には、神々が列席したのである。

『ピューティア祝勝歌』第3には、ペーレウスの結婚（とそしてカドモスの結婚）の宴の様子が歌われている。そこでは、「彼らは、黄金の玉座におわす高貴なクロノスの息子たちと相まみえ、結婚の祝いの品々を授けられた。そして、ゼウスの恵みにより昔の労苦を逃れ、心を晴らしたのである²¹⁾」と述べられている。天上の神々が列席した宴は、ペーレウスのそれまでの苦難に疲れた心を癒すものであったと思われる。ペーレウスは、ケイローンによってゼウスの定めを成就し、女神との結婚という人間として最高の幸福を手に入れたのである。

ペーレウスの結婚の宴の様子は、ティーマーサルコスの勝利の宴に重なるものである。勝利の宴で歌われる祝勝歌は、勝者の疲れた心身を癒すものである。ティーマーサルコ

の塩水」である戦わねばならない「陰謀」とは、「光」への到達を、すなわち祝勝歌の完成を妬むものであると思われる。「腰を捕らえている深き海の塩水」は、祝勝歌が完成し、癒しを得るであろうティーマーサルコスへの嫉妬でもあるが、それは同時にピンダロスの詩作を阻もうとするものともなろう。ピンダロスたちにとって、祝勝歌の完成により得られるこの光も又、困難なしに手にすることはできないと考えられる。しかし、敵どもは「大地に倒れ、嫉妬深く眺め、暗闇で虚しき決意を振り回す」ことになる。

そしてピンダロスは、「運命の君が我に与えしいかなる徳も、時が、穏やかに流れ行き、運命づけられしことを成就せんことを」知っているのだと歌う。

ピンダロスが、祖先から伝わる徳が、何事においても人間に成功をもたらすのだと考えていたことはよく知られている¹⁷⁾。彼は、「生れながらの運命が、全ての行為に決定を下すのだ¹⁸⁾」と言い、「生まれながらの栄光に包まれている人は、大いなる力をもつ。しかし、教わっただけの蒙昧な人間は、その時々には生きている。彼らは、確固とした足取りで競技場に降り立つこともなく、無数の徳を不甲斐ない心で試みる」とも語っている¹⁹⁾。

ティーマーサルコスも、生来の武勇によって勝利を得たと思われる。そしてピンダロスも又、今詩歌において生来の徳を發揮しようとしている。そしてピンダロスに「運命の君が与えた徳は」、「時が」成就するのである。これは、光に到達することを意味し、勝者の疲れを癒すものとなる。すなわち、いかなる陰謀があろうとも、神に定められた運命は、時のうちに、必ず成就するのである。言い換えれば、祝勝歌は完成し、ティーマーサルコスは、心身の疲労を和らげることができるのである。それ故、ピンダロスは、「甘き音色の豎琴よ、直ちにリュウディアの旋律でこの歌を編み上げよ」と祝勝歌を続けて歌うことを宣言しているのであろう。

しかし、ピンダロスは、その後も勝者を直接的に讃えることはせず、テラモーンの息子たちの栄光に軽く触れた後、テラモーンの弟ペーレウスの神話に入る。

しかし、ペーレウスは、ペーリオン山の麓で
イオールコスを敵に降らせ、ハイモニア人に与えた。

アカストスが妻ヒッポリュテーの巧みな計略を受けたがために。

ペーリアスの息子は、

ダイダロスの剣を待ち伏せ、彼に死を仕組んだ。

しかし、ケイローンが彼を守り、

ゼウスにより定められた運命を成就したのである。

ペーレウスは、全てを焼き尽くす恐ろしき炎と獐猛なる獅子の

鋭い爪とその歯先を阻止し、

高き玉座のネーレーウスの娘の一人と結ばれた。

運命の君が我に与えしいかなる徳も
時が、穏やかに流れ行き、
運命づけられしことを成就せんことを。
甘き音色の竖琴よ。
直ちにリュウディアの旋律でこの歌を編み上げよ。(33-45)

「歌の決まりと急ぎ立てる時間は」、ピングロスにこれ以上物語を続けさせない。彼は、「新月の祭りの儀式に触れ」、すなわち新月に行なわれたこの競技の勝利に触れて、勝者を讃えることに「心を引き寄せられている」のだと言う。「歌の決まりと急ぎ立てる時間」とは何を意味するのか、すなわち、何故ピングロスが神話を中断しなければならなかったかについて、様々な議論がある¹³⁾。

考察してきたように、テラモーンの神話とその格言においてピングロスが意図したことは、単に勝利の困難さだけではなく、心身の疲労の癒しの必要性であると思われる。そして、詩歌は、これを癒す術を持っている。詩人であるピングロスには、今ここで限りある時間に祝勝歌を完成させ、勝者の心身の疲労を癒す務めがある。それ故、彼は、困難な戦いに勝利した者には癒しが必要であることを示唆して神話を終え、それを受けて、今その癒しをティーマーサルコスに与えることにピングロスの「心が引き寄せられている」ことを述べているのであろう。すなわち、ピングロスは、ここで突然テラモーンの伝説を中断しているのではなく、祝勝歌による癒しの必要性という物語を引用した目的を果たし、現在のティーマーサルコスの勝利を讃えることに話を移していると解釈すべきであろう。

続けて、ピングロスは、「深き海の塩水が汝の腰を捕らえようとも陰謀と戦うのだ」と述べている。彼らの「腰を捕らえ」る「深き海の塩水」とは何か、「陰謀」とは何かについても度々議論されてきた¹⁴⁾。この「陰謀」は、続いて述べられる「敵」の「陰謀」であると思われる。そして、「敵」は、「大地に倒れ」「嫉妬深く眺め」る男たちであろう。その「嫉妬深き」「敵」たちが、ティーマーサルコスの「腰を捕らえ」る「深き海の塩水」すなわち「陰謀」をめぐらしているのであろう。ピングロスたちは、「敵より見事に光に到達するであろう」と言う。

考察してきたように、ピングロスにおいて「光」とは、闇に対する光であり、苦難からの脱出であり、選ばれた人間に神から与えられた栄光である。又彼は、「あらゆる苦難の光となる喜びを、苦勞なしに得るものはほとんどいない¹⁵⁾」とも述べている。そして、癒し手は、神より光を与えられたものであった。ティーマーサルコスは、レスリングの試練多い戦いを行なったが、すでに勝利を得ている。従って、この光は、戦いの勝利を表わすものではない。

今ティーマーサルコスは、勝利を得たが疲労している。今後、勝者とピングロスが手にするであろう光は、勝者の心身の疲労の癒しであると思われる¹⁶⁾。それは、この祝勝歌の完成によって成される。従って、ティーマーサルコスの「腰を捕らえ」る「深き海

いることが述べられて、その後、そのテーバイの英雄ヘーラクレースと勝者の祖国アイギーナの英雄アイアコスの息子テラモーンが共に、トロイアやメロペス人や巨人アルキュオネウスと戦い、勝利した神話が歌われる。

かつて、ヘーラクレースと共に、
逞しいテラモーンはトロイアを滅ぼした。
又、彼らは、メロペス人をも
巨大な恐ろしき兵士アルキュオネウスをも滅ぼした。
しかし、倒れる前、アルキュオネウスは、
12の馬車とその倍の英雄なる御者を
巨岩で押し潰したのである。
明らかに、戦いに通じぬ者は
この言い伝えを理解し得ぬであろう。
何かを成せば、何かを被るのだ。(25-32)

ヘーラクレースとテラモーンが、仲間として戦い、勝利したことは、テーバイ出身のピンダロスとアイギーナ出身の勝者の親しい関係を表わしていると思われる¹⁰⁾。しかし、倒される前、巨人アルキュオネウスは、巨岩を投げ付け、24人の部下を殺したことが述べられる。彼らは、勝利したものの、多くの損害と苦しみを受けねばならなかった。「何かを成せば、何かを被る」のである¹¹⁾。たとえ勝利したとしても、なんらかの苦しみは被らねばならない¹²⁾。レスリングで勝利したティーマーサルコスも又、四肢を疲労させねばならなかった。しかし、冒頭で述べられているように、勝者の疲労した心身は、祝勝歌によって癒されることができるのである。

この神話は、ティーマーサルコスのレスリングによる勝利への道の困難さを示唆した神話であると同時に、いかなる戦いの勝利も心身の損害を被るものであり、そこには癒しが必要となることを表わしていると考えられる。それを成すのは詩歌である。

ここでピンダロスは、この物語を打切り、次のように歌う。

しかし、歌の決まりと急ぎ立てる時間は、我に長く語らせぬ。
我は、新月の祭りの儀式に触れ
心を引きずられる。
深き海の塩水が汝の腰を捕らえようと陰謀と戦うのだ。
我々は、敵どもよりも見事に光に到達するであろう。
他の男たちは、大地に倒れ、嫉妬深く眺め
暗やみで虚しき決意を振り回すのだ。

我は知る、

『ネメア祝勝歌』第4における詩歌と癒しについて

ある者には四肢に薬草を塗り、
ある者には手術を施して。(Pyth. 3. 47-53)

ここでは、医者となったアスクレーピオスが、呪文、痛み止め、薬草、手術によって人間の病を癒したことが述べられている。呪文は、古代の医術の一つであった⁸⁾。ピンドロスも又、呪文を塗り薬、手術等と並ぶ医術の一つとして述べているのである。

又『ネメア祝勝歌』第8では、次のように歌われている。

行為に相応しい讃歌を叫ぶことに
我は歓喜す。
人は、呪文で苦悩を取り除く。
勝利を祝う歌は昔にもあった。
アドラストスとカドモスの子孫の戦いの時にも。(Nem. 8.48-51)

ここでは、人間は、讃歌による「呪文で」競技の「苦悩を取り除く」のだと述べられている。詩人ピンドロスにとって、呪文は、競技の勝者の疲れを慰め、苦悩を取りのぞく詩歌のもつ医術なのである。それ故、祝勝歌を受ける勝利は、「疲労濃くさせる強打(の痛みの)治療⁹⁾」とも言われるのであろう。

さらに『ピューティア祝勝歌』第1の冒頭では、12行にわたり歌の力が述べられている。それによると、詩歌は、鳥の王なる鷲も猛々しい軍神アーレースさえも心地よい眠りに付かせる。そして又、詩歌の矢は、「神々の心さえも呪文にかける」ものである。このように、詩歌は呪文により、心身の両方を癒し、心地よさを与えることができるものなのである。

『ネメア祝勝歌』第4において言われる「試練に呪文をかける」も又、四肢と共に心の疲労をも治療すると考えられるであろう。

『ネメア祝勝歌』第4と癒しについて

『ネメア祝勝歌』第4の冒頭では、「勝利の喜びを伴う詩歌は、その試練に触れて呪文をかけ、戦いに疲労した心身を何よりも癒す。なぜなら戦いの勝利は一瞬であり、その瞬間を長く伝えるのは祝勝歌であるから」と歌われた。では、ここで述べられた詩歌の持つ医術は、この作品全体にどのように関わっているのでしょうか。

続くスタンザにおいて、聴衆は、この詩歌がネメア競技会のレスリングで勝利したティーマーサルコスに捧げられていること、そして彼がアイギーナ出身であることを知る。そして、音楽家であった今は亡き勝者の父ティーモクリトスがもし生きていたならば、「豎琴をかき鳴らし」「幾度もこの旋律に耳を傾け」「勝利を飾った息子と祝うであろう」(13-16) ことが歌われる。

続いて、勝者ティーマーサルコスが、すでにアテーナイとテーバイの競技に優勝して

汝は、時宜に叶った医者である。

パイアーンは、汝に光を与えた。

優しき手を当てて、傷の痛みを診なければならぬ。(Pyth. 4. 270-271)

アルケシラス王は「時宜に叶った医者」である。パイアーン・アポローンは、アルケシラス王に「光を与えた」。この神が与えた光とは、彼を「時宜に叶った医者」にすること、すなわち癒しの術である。これをピンダロスは、光と述べているのである。ピンダロスに悪しき光という言葉はない。多くの場合、光とは、闇に対する輝き³⁾であり栄光⁴⁾であり、苦難からの脱出⁵⁾である。又それは、神から送られるものである⁶⁾とも言われる。そして光とは、神により選ばれた人間のみ与えられる恩恵⁷⁾である。さらに又、ここで歌われているように、癒し手は、神より光を与えられたものなのである。すなわち、医術も詩歌の術も神により選ばれた人間のみ与えられる恩恵と考えることができよう。

又、ここでピンダロスがアルケシラス王に診るように頼んでいる「傷の痛み」とは、故国を思いながら追放の憂き目に会っているダーモピロスの心の傷である。傷ついたダーモピロスの心を癒すように頼んでいるのである。ピンダロスは、明らかに癒しの対象を身体のみならず心をも考えていたと思われる。

『ネメア祝勝歌』第4の冒頭では、詩歌は、試練に「呪文をかけ」四肢を癒すと歌われた。呪文とは、いかなるものであろうか。『ピューティア祝勝歌』第3には、アスクレーピオスとその母コロニス⁸⁾の神話が述べられている。アポローンは、自分の子を宿しながら人間の愛人を作り、自分を裏切ったコロニスを罰するため、彼女を殺した。しかし、アポローンは、コロニスの胎内の子を哀れに思い、彼女の死体から自分の息子を取り出した。そして、その息子すなわちアスクレーピオスを医者にするため、医術や音楽等の術に長け、多くの英雄を育てたケンタウロスの賢者ケイローンに息子を委ねたのである。

アポローンは、赤子をマグネーシアのケンタウロス（のケイローン）許に委ねた、人のため痛ましき病を癒す術を学ばせようと。

やがて、持病に苦しめられやってくる者を

鋭い輝き放つ青銅の武器や

遙かから投げ付けられた石で、手足を痛めた者を

夏の暑さ、冬の寒さに身体を疲労させやってくる者を

アスクレーピオスは、苦痛から解き放ったのである。

ある者には優しき呪文で癒し、

ある者には苦痛を和らげる薬を飲ませ、

える」からである。すなわち、勝利は、瞬間の出来事である。この瞬間の行為を永遠のものにするのは、「女神カリスたちの恵み」により「心の奥底」から現われる言葉すなわち詩歌である。

女神カリスたちは、人間の様々な喜びを司る女神たちである。その一人にエウプロシユネー、すなわち1行目で述べられている喜びがいる。従って、「女神カリスたちの恵み」により「心の奥底」から現われる詩歌は、勝利の喜びを伴う祝勝歌であり、又「最高の医者」と言われる「喜び」は、祝勝歌に伴っているものであると思われる。それ故、ここでは、レスリングの勝利が決定したとき、勝利の喜びを伴う祝勝歌は、その試練に呪文をかけ、戦いに疲労した勝者の四肢を何よりも癒すのだと歌われていると思われる。

ここには、詩歌と医者類似が見られる²⁾。ピンドロスは、ここで詩歌のもつ癒しの力に言及しているのである。この論文は、ピンドロスの述べる癒し手と詩歌の関係を考察し、それがこの作品全体にいかに関わっているかを説き明かそうとするものである。

ピンドロスにおける詩歌と医術について

最初にピンドロスが語る詩歌と医術について考察してみたい。元来、古代ギリシアでは、医術と詩歌は密接に関係していた。パイアーン（「医者」の意）とも呼ばれるアポローンは、治療の神であり、音楽の神である。ピンドロスもアポローンについて次のように語っている。

アポローンは、死すべき男女に痛ましき病の
治療をもたらせし神である。
彼は、竖琴を与えた神であり、
彼の望む人々に女神ムーサを使わず、
平和と調和を心に授けんと。(Pyth. 5, 63-66)

ここでは、「痛ましき病の治療を与えた」アポローンは、人間に「竖琴」すなわち音楽をも与えた神であり、又「彼の望む人々に女神ムーサを使わず」神である。言い換えれば、彼に選ばれた者のみが「女神ムーサ」、すなわち詩歌の技を得ることができるのである。

又、ここでは、病の治療は、肉体を楽にし、アポローンの司るもう一つの技である心に「平和と調和」を与える詩歌の技は、人間の心を癒すとも考えられるであろう。

アポローンは、自分の「望む人々」に詩歌の技術をもたらすと同様に、自分の望む人間に癒しの技術をも与える。キュレーネーのアルケシラス王に捧げられた『ピューティア祝勝歌』第4には、以前キュレーネーを追放されたゲーモピロスの帰還を認めるようにとピンドロスがアルケシラス王に求めている箇所がある。そこで彼は、次のように述べている。

『ネメア祝勝歌』第4における詩歌と癒しについて

櫻内理恵

序

ピンダロスの『ネメア祝勝歌』第4は、レスリング少年の部の勝者アイギーナのティーマーサルコスに捧げられた96行からなる作品である。この作品は、前473年に創られたという説もあるが、確定されていない。この祝勝歌には、アイギーナのテラモーンの伝説とその異母兄弟ペーレウスの伝説の2つの神話が含まれている。そしてこの両方の伝説は、短く歌われた後、突然打ち切られる。さらに、テラモーンの神話の後に述べられる33-45行は、非常に不明瞭な言葉として知られている。これまで、この作品について、これらの神話は何を意味しているのか、ピンダロスは何故それを中断しているのか、そして、神話を中断した後、ピンダロスは、何を述べたかったのかという問題が幾度も提起されてきた。

この作品は、次のように始まる。

試練が判定されたとき、
最高の医者とは、喜びである。
女神ムーサの娘なる巧みな歌は、
試練に触れ呪文をかける。
温む水もこれほど四肢を優しく和らげはしない、
竖琴を伴う讃歌ほどには。
言葉は行為よりも長らえる、
女神カリスたちの恵みにより
舌が心の奥底より引き出しし言葉は。(1-8)¹⁾

レスリングの競技の勝利が判定されたとき、「最高の医者とは、喜び (*εὐφροσύνη*) である」。詩歌の技を司る「女神ムーサの娘なる巧みな歌」は、レスリングの辛かった「試練に触れ呪文をかける」。試練に呪文をかけた歌は、いかなるものよりもレスリングの試合で疲労した四肢を癒す。「温む水もこれほど四肢を優しく和らげ」るものではない。「竖琴を伴う讃歌」は何よりもこれを癒すのである。なぜなら、「言葉は行為よりも長ら